
高校生のリリカル爆走

建宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生のリリカル爆走

【Nコード】

N0284X

【作者名】

建宮

【あらすじ】

死因は何だったか・・・そう確か女の子が車に轢かれそうだったから助けた時・・・ではなくそのあとに助けた女の子から全力で拒絶されてフラッと道路に出たらバーンとかだった気がする

ブローグ

一言で言うなら俺は転生者。そして此処は大自然

「なんでさー!!」

（この発端は数十分前）

「お主は死んだ」

「はいはいはい・・・はい？」

目の前の爺さんはそんな言葉から会話を開始した

普通はもつとなんて言うか。せめて初対面なんだし挨拶くらいはしようよみたいなさー

「混乱するのも無理はない。が起きてしまったものは仕方ない」

「仕方ない。ああ、確かに起きたもんはしゃーない」

「じゃろう？ 例えそれがワシのミスでも仕方ない」

「そうそう、例えお前のミスでも仕方ない」

「じゃろつて、んん?! 待て! 待つんじゃ! 言ってる事とやってる事が!」

俺の脳内ではキチンとそう処理したのだが体はそうも処理してくれなかったようだ

俺は無意識の内に爺さんをボコボコにしようとして動いていたらしい

「まったく最近の若いもんは」

「るさい、で? あれ? よくある転生系か?」

「うむ、説明が早くて助かるのう」

確かに若干オタク気味の俺としてはこのシチュエーションは嬉しいが!!

シヤナ三期を見れない内にポックリ行くのは思いのほかイライラする

「あと二、三発くらいは」

「駄目に決まっておるじゃろう」

「駄目か」

「駄目じゃ」

そこまで言うなら仕方ない

「考えてる事とやっている事が違う?!?!」

どうやら俺は余り諦めの良い方では無いらしい

「だとするとアレか。今度は転生特典か」

「そうじゃ、お買い得じゃぞ」

殴った所が多少腫れている爺さんが何かトランプ的なカードを数枚取り出す

「お買い得ねー」

「そうじゃぞ?この中から好きなカードを選ぶが良い」

「好きなカードねー」

悩むなー……ん?これってハズレとかあんのかな?それだったら

マジやだなー

まー転生ってこのシチュだけど十分アタリなんだろうけど

一枚か

「これだ！」

「ちょ！お主！」

悩みに悩んでブリッジ体制までして悩んだ結果

俺は全てのカードを鷲掴みしていた

「……。」

「……お主い」

爺さんは俺を残念な物を見るような目で見る

「こつち見んなキモイ」

俺は結構強欲らしい

「全部取る奴があるか？」

「す、好きなのって言っただろ！誰も一枚とは聞いてない！」

まるで子供の言い訳を言う俺は高校生

「まーあーそうじゃのー」

「み、見るなやい」

「まーいいわい。一つって言い忘れたワシのせいでもあるよっじゃし」

心が広い爺さんに心の狭い俺は精神的ダメージをくらう

「では特典も決まった事じゃし、さっさと送ろうかの」

「つとそう言えば俺は一体何処に飛ばされるんだ？」

「ん？惑星」

「大雑把過ぎる?!」

よくある様に足元に穴が開く

がかしい！予想していた俺に避けられない物は無い！

横に軽く跳ぶ

「がそれもまたお決まりの行動じゃよ」

穴があつた

あげくに落ちる瞬間に見えたが最初に開いていた穴の周囲全てが穴だらけだった

用意周到な爺さんに驚き

くで現在く

「惑星・・・か」

ある意味悟りを開きそうな俺

惑星って括りは広すぎるだろうが。・・・まあ森があるんだから生物がいるのは確かなんだろうけど

「お腹すいた」

ここは野生的にサバイバルでもしょうか

ああ、でも俺。雑草や木の実の知識とか知らんから何が食えるか分かったもんじゃねえな

「いつそ次に出会った動物を特典能力でブッチして食べるか」

またもやお決まりでガサゴソと音がして草むらから何か飛び出す

「よっしゃー！食べ物ゲットオオオー！！」

「た、たべ？！わたしをたべちゃうのお？！いやああああー！！」

草むらから出てきたのは少女だった

しかもスツゲエ美少女だった

やっべ、食べる話・・・どしょ？

プロローグ（後書き）

始まりました転生モノ！転生系は初めてですから妙な所もあるでしょうが気長に見てくださいねっ！

一つ一つの文字数は少ないと思います！
では次回！

一話 side 雨水

前回のあらすじ

俺、お腹減った 草むらから何かが出てきた！ 草むらから美少女が現れた！ 勢いで食べる発言 美少女、恐怖 そして現在

「お、おいしくないですよお」

「う、うん。ん？いやむしろ美味しそう？」

ジュルリ

「ひい！」

ロリOK！ペドNO！

「はっ！」「めんめん、ちょっと道に迷っちゃってー」

「まいごさん？」

「そうそう、行くあて無しの迷子さんなんだよね。アハハ」

「かえるおうちないの？」

美少女は恐る恐る俺に近付き会話のし易い位置で立ち止まる

食う発言はチャラにしてもらえたようです

「無い！・・・かな？」

此処は日本じゃなさそうだし仮に日本でも前の家が存在してるとは限らない。ってかそもそも家があったとしてそこに俺の居場所はないかも

・・・ん？待てよ

いまの俺ってホームレス？

「わたしとおんなじ」

まさかの衝撃発言

こんな美少女が俺と同じくホームレスとは・・・危険だ！

「なら一緒に行こう」

男は狼！男は獣！男は・・・んーと。そだ、男はスケベ！よし三拍子揃った

「いいの？」

「もちろん！」

「うふあ」

「ん？」

「うううああああん！！！！」

何故か泣き出してしまった。女の子って難しい・・・じゃなくて

「ちょ！え？！なに！俺悪い事でもしちゃった？！」

「あう、ふええちがうの。わたし、うれしくて」

何だか純粋な子供の心を見ると・・・真っ黒な大人は酷く傷つく

「くっ！これは強敵だ、深く抉ってくるぜ」

「だ、だいじょうぶですか！いや！しんじゃあー！」

いや、心の傷ですから肉体的には問題無いです

そんなこんなで美少女と一緒に旅をする事になりました

「あ、これはたべれますよ」

「ほんと？サンキュ」

「いえ」

美少女の前に住んでいた家はこの辺らしくこの辺の動植物にはとても詳しくった

ついでながら驚く事に美少女はファンタジー生物まで持っていた

「キュクルウ」

ドラゴン（幼態）である

「毎度美味しそうだよな」

「な！フリードはともだちです！」

美少女は俺からフリードを遠ざける

別に本当に食おうとは思ってないの・・・いまは・・・

最初はマジで非常食と考えていた

「それにしても俺達は一体何処を目指して歩いているんだろう」

「さあ？わたしもむらからは、でたことありませんでしたから」

とは言え一定の方向に向かって歩いていればその内、森脱出は出来るだろう

「ギャオオオオ！！」

「見てない見てない」

「りゅうしゅ？！なんで！！」

「知らない知らない。俺はあんな表現し難いのを竜とは認めない。リオレウスくらい持ってこいバーカ」

目の前の形容し難い竜種さんは明らかに涎を垂らして俺等を見ている

「ね、ねらわれてせんか？」

「キャラ、良いか？良い事を教えてやる」

「はい！なんですか！雨水さん！」

初名前登場。美少女ことキャラ・ル・ルシエちゃん、俺こと雨水秋春・・・あれ？俺だけ名前でキャラは俺のこと苗字で呼ぶんだ

「耳を塞げ。目を閉じる。さすれば新たな道がひら

「ひらきません！しぬきですか?!」

セリフの途中に割り込まれた

「ガウガー！」

「そだ！フリードがいた！」

「むりですって！フリードはまだこともです！」

そうか・・・なら仕方ない

「逃げよう」

「さんせいです」

一、二、三

「走れ!!」

「ガグルガアアアアアアア!!」

「おつてきてますよおおおお!!?」

大丈夫。俺等はまだ死なないはず・・・たぶん・・・きっと・・・
だよな?

一話〱side 雨水〱（後書き）

じゃじゃーん！連続投稿！大した意味は無いし書ける内に書いちゃ
つとけー！的な勢いです！

次回もお楽しみあれ！

二話 side キャロ

私の村は古くから召喚魔法を継承していた小さな村だった

その村で私は小さい頃から大きな力を持って、その力を恐怖され追い出された

私は村から出てすぐにどうしようかと森を彷徨っていると雨水さんに出会った

初めは変な人と思っていたけどとっても良い人で面白い人

「ほんとうにであえてよかった」

「ちょ！キャロ？！そんないまにも死にそんなセリフ吐かないで！」

「？」

私は雨水さんに手を引かれ竜から逃げる

もつと私が召喚魔法を上手く使えてたらこんなのヘッチャラなのに

「あ！そだ！」

「どうしたんですか？！」

「特典があつた！」

「とくてん？」

雨水さんは私を草むらに隠すと竜と向き合った

「さあ！やってやんよ！」

・・・。

あれ？

雨水さんは構えた状態でダラダラと冷や汗を流し始める

「使えねえ」

「え？」

「が！しかない！そこで諦める俺では無い！」

痺れを切らして竜が雨水さんを襲いそうになった瞬間、バツ！と手を前に突き出して竜を止める

「なにを」

「良いか！竜よ！」

「グルウ？」

「このお方を誰と心得る！」

「わたし?!」

雨水さんは私を竜の前に突き出すと私を堂々と竜に紹介する

竜は当然此方の言葉は分からないので首を傾げている

「このお方は村一番のお偉いさんの娘！」

「ちがいます」

「お前も竜の端くれならその意味が分かるだろ！」

「たぶんことばつうじてませんよ？」

と思ったのだけどビクッ！と竜は振るえ後ずさる

「キャロの村はお前ら竜の長と代々交流してきた村！・・・たぶん」

「あ、それあってます」

長って言うか、この辺の守り神なんですけど

「だからお前！もしこの娘を襲おうものなら！お前から長が黙ってないぞ！」

「あれ？それだと雨水さんが・・・」

「え？」

ほら、竜が雨水さんを標準付けちゃったよ

「あれえ？なんでえ？」

「さあ？」

「竜！キャロに免じてこの場は譲ってやろう！」

「なんでえらそうなの？」

「グルウグルウ・・・ウ？」

竜は少し考えれる仕草を見せると背を向けて歩き出した

「よっしゃー！」

「すごい？のかな？」

こうして私達の危機は去った

「さて！今日は此处で寝よう」

竜に追われたせいで折角真っ直ぐ行っていた道も分からない状態になり夜も遅くなってしまったので洞窟で一晩過ごすことになった

「ふっふーん」

男の人と一緒に

いやいや、そんなの村でもよくあった。うん、あったはず。．．．
あったっけ？

「あーそうだー。キャロー」

「ひゃいー！」

「なに慌ててんだ？・・・まあ良いけど、奥になんか湯が沸いてたからそこで体でも流してきたら？」

「あ、ありがとうございます」

行く？うん、お礼言っただけは行かないと

私は奥に進んでお湯の沸いている小さな湖の淵に来る

後ろを振り返るとギリギリで雨水さんの背中が見える・・・つまり雨水さんからすれば後ろを振り向けば私が見える

「わたしはこども」

そう自分に言い聞かせて服を脱ぐと湯に浸かる

「湯加減どうだい？」

「キユクルウ？」

「あひゃへいひゅい！？」

「なに言っているんだ？」

雨水さんがフリードを頭に乗つけた状態で洋服を畳んでおいた辺りに立って私を見下ろしていた

「溺れてないか不安だったけどどうやら足の付く程度の深さだったみたいだな」

私を心配してくれたらしい

「にしても」

雨水さんは目を凝らして私の体をジックリと見る

「んー」

「なんですか？」

「怪我は無いみたいだ。森の中を走ったから擦り傷くらいは覚悟してたんだが」

「ええ?! そっちですか?!」

女の子としては少しは気を使って欲しかったです

「？」

雨水さんが完全に私を子供扱いしている事を肌身に感じました

二話 side キャロ (後書き)

さっそくチートかもな特典披露?!と思われましたがこの主人公!
チートだけど早々楽しんでチートにさせる気はありません!

以上!

あ、誤字等ありましたらご指摘下さい

三話 side 雨水

前回の失敗により俺の爺さんから貰った転生特典が判明した

それは全部で六つ

説明は面倒なので簡略化させてもらう

一つ、万物は全て数字で語れり。

これは世界のありとあらゆるモノをステータス化して視覚情報として取り入れれるっぽい

二つ、天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。

カリスマ性の向上、良く分からんが生物を纏めるのが上手くなったらしい

三つ、我が後ろに道が有りけり。

他人に教える事がとても上手くなったらしい

四つ、全ての事象を観測する者。

ようは単純に物覚えが良くなったらしい

五つ、若き日の思い出、老い日の勇姿。

何でも年齢操作系の能力らしい、自他ともに可能と

六つ、白紙不明

唯一真っ白のカードで何がしたかったのかサッパリ。もしかしたらこれはハズレくじの可能性あり

総合的に判断して・・・戦闘に使えるそうなのがなかった、と言うか
爺さんのネーミングセンスにビックリだ

厨二病も真っ青な痛々しさ

まあジツクリ考えれば使えそうなんだろうけど咄嗟に使えるのは皆
無だった

「うすひさあん」

さて現実逃避もこれが限界か

幾ら美が付く女の子でも幼女に手を出しちゃ駄目

幾ら隣に寝ているキャラの寝顔がとても可愛くても人間我慢が大切

「クルウ？」

「おう、フリードか」

先程からフリードが俺の服を噛んで何かから引き剥がそうとしている

「あふ、あん、ふあ？うすいさん？」

「おはよ、キャラ」

「・・・ちかい」

恐ろしい事に何時の間にかにキャラ口に抱き着いていた

あれ??マジでいつから??

「ハハハ、ごめんごめん」

「・・・。」

色の無い瞳でキャラはジトーっとな俺を見つめる

やめ!そんな目で美少女から見られてると何かに目覚めそう!

「まあいいです」

「はあ」

許して貰えたところで朝食

何か食べそうな薬草と木の実。正直肉や魚も欲しいがホームレス生活なのだから文句は言えまい

「マズッ」

体は正直

「がまんしてください」

「キャラは平気なのか？この味」

「えいようあるんです」

「いや味の話を・・・」

「えいようがあるんです！」

不味いと思ってるんだな

我慢強い子だな、お兄さん尊敬しちゃうっ

「早く人の住んでる所に出て仕事探さないとなー」

「ですね」

「止まれ！此処は保護観察区域で関係者外は立ち入り禁止領域だぞ！」

何処からか声がした

俺とキャラは周囲を見渡すけど誰もいないので空耳として処理

「疲れてるんだろうか」

「そろそろきゅつけいします？」

「キュクル」

その場で休めそうな場所を探し飲み水を取り出す

「つて！貴様等！話を聞け！」

「キャラ、ごめん。俺ちよつと寝た方が良いかも」

「わたしもです」

「キュクツ！キュクツ！」

ん？どしたフリード？

上？

・・・上

人が空を飛んでいる、飛ぶって言うか浮くだなアレは

「キャロ、あれなに？知り合い？」

「かんりきよくのかたでは？」

「管理、局？」

何の管理だろう？

「ようやくか、でだ、貴様等そこで何をしている」

「休憩」

「きゅうけいです」

「キユクルウー」

カチツとスイッチを切り替えるような機械的な音がして視覚情報が
変わる

時空管理局自然保護隊 魔導師ランクC 飛行魔法使用中 敵意無し

必要な情報を必要なだけ確認する、でないと表示情報が多過ぎて面倒。全力で見ようと思えば人としての構成情報まで見えてくる

お？意外と使える能力の予感！

「あれだな。動物愛護団体の人だ」

「どうぶつ、あい・・・だんたい？」

キャラには少し難しい単語だったようで途中を省いて発音した

「此处が立ち入り禁止区域と知っているのか」

「知らん」

「へえゝはつまみです」

「キュー？」

「・・・そうか。此处は立ち入り禁止区域なんだ、なので外に出て欲しい」

「案内を頼む！」

なんだかなーと言った感じで局員の方は此方まで落りてきて道案内

をしてくれた

え？此処って就職出来そうな場所が無いの？

三話 ｝ s i d e 雨水 ｝ (後書き)

およそ1500｝2000を目処に書いてます！

にしても特典能力名。我ながら痛々しいネーミング！アハハ ｝

四話 side 雨水

前回のあらすじ

起床 キヤロ枕の抱き心地が良すぎる キヤロに冷めた目で見られる 何かに目覚めそう 朝食 マズッ 職を探して放浪 人が空から声を掛けてきた 道案内をしてもらう 此处一帯に就職出来そうな所は無いそうで どうしょ？

「でー！」

動物愛護団体モドキの人達の所にお世話になる事になった

「う・す・いさん？」

「おっと手を動かさないとな」

「そうですよっ」

キヤロに促されて食材を切っていく

俺等の仕事は料理担当

「ん？キヤロは結構手付きが良いねえ、将来は良いお嫁さんになり

そう」

「えっ?! あ、あう、わ、わたしはつすいさんの」

「キャロ?! 鍋が!」

「え? あ! すみません!」

危ういところだったが如何にか間に合い難を逃れる

そしてやっぱりこんなキャンプみたいな所での定番。カレーを完成させる

「たんと召し上がれ!」

「おおっ! スゲエな! お前等!」

「ほんとお美味しそう」

ちょうど団体が帰ってきたので配膳を行なう

「そいや、お前等ミッドには付いてくる気あるか?」

「ミッド?」

「首都だ、首都」

首都かー、それなら就職先は多そうだ

「行く！行こう！今すぐに！」

「今は行かねえよ。こっちの仕事が終わってからな」

「チツ役立たず」

「んだとっ？！」

「けんかはだめですよっ！！」

「「はい」」

何故か俺だけおたまで殴られた

キャラが団体の女性に囲まれてドンドンと強くなっていく・・・

「ふうー腹一杯」

「ですねー」

「キュックー」

食事も終わり、今度は食器洗い

「おう？何だお前等、仕事熱心だなー」

俺等を道案内してくれた団体のおっちゃん

「どした、おっちゃん。こっちに何か用か？」

「様子見だ。様子見・・・にしてもお前等、なんか夫婦みたいだな？兄妹だっけ？」

「ふっ！ふっふ！ですか？！」

「違うぞバカヤロー、俺とキャロは・・・ん？旅仲間かな？」

「なんだそりゃ」

「わ、わたしはふっふが・・・」

え？なんだって？

「そうそう、伝えところと思ったんだがミッドには四日後に行く予定だからな」

「そうか、サンキュおっちゃん」

「おう！」

良い奴だな、おっちゃん

二日後

事件が起こった

まあ俺にとっては大した事件でも無かったはずだし関わらないつもりだったのだが

「おらあ！お前ら動くなよ！動くとコイツがどうなっても知らねえぞ！」

「雨水さん！助けて！」

「黙れ！」

相手はこの辺一帯を荒らす密猟者らしい

愛護団体の皆が追っていたのだがこのキャンプに入られ偶々居合わせたキャラを人質に取らてしまった

「クソッ！」

「チツせめて戦闘に向いた特典があれば」

向こうは武器持ち人質持ち

密猟犯罪組織末端 魔力ランクD 敵意有り 所有魔法はプロテク
トとシューター

・・・組織？

「おっちゃん。もしかしてコイツって仲間とかいる？」

「ああ？！いないはずだが・・・」

「キャラ口を無事に取り戻す方法か」

戦力的には余裕で勝っているがキャラ口を楯にされている以上はそう
も言えない

しかも、もしかしたら近くにアイツの仲間が潜んでるかも

最悪だ

「密猟者！聞け！取引がある！」

「な、なんだ！」

かなりの焦っている。味方が居るならもっと余裕に構えて居そうだが、ど居ないのか？捕まりそうだったから切り捨てられたとか

「その子を放せ！そうすればお前の条件を何でも一つ叶えてやろう！」

「信じられるか！」

「ん？だがいまのお前の状況はかなり悪いぞ？逃げるにも此処はお前にとって敵の本拠地、既に囲まれたようなもんだ。逃げるのはまづもって不可能」

「・・・へへっ、そんなのコイツがいれば」

「ひい」

持っていたナイフをキャラの首に突きつける

マジでアイツ追い詰められてるよ・・・思考も鈍ってるみたいだし交渉がし難い

表情に出さずに悩んでいるとおっちゃんは何やら俺に目で合図

うしろのくさむらにひそませている

成る程、このまま俺に犯人の注意を惹きつけて置いて欲しいって事が

「そいつが居れば何だってんだ？」

「あん？」

「もしお前がそいつに危害を加えたら本当に歯止めが切れてお前は
終わりだぞ」

「くっ・・・い、いいのか！お前は！コイツに消えない傷が付いて
も」

「ハッ！別に良いに決まってんだろ、勘違いしてないかお前は俺と
そいつは他人で更に言えばそいつは別に此処の自然保護隊の関係者
でも無い。この意味分かるよな？」

犯人は苦い顔をするがキャ口は放さない

・・・まだか

「良いんだぜ？ほら、やれよ」

「・・・雨水さん」

「ほ、ほら！良いのか！コイツもお前に助けを求めてるみたいだぜ

！
」

「誰も求めた結果が手に入る訳じゃねえよ。いまのお前みたいに
な」

「な・・・マジかよ。コイツ」

警戒が緩んだ

そう感じた瞬間に犯人のナイフに光の縄みたいなのが幾重にも絡まり取り囲んでいた保護隊の皆で犯人を取り押さえた

これで犯人も捕らえキャラも無傷で取り返す事が出来た・・・
だけ
どキャラはそれから簡易テントに引き籠もった

四話 ｛ s i d e 雨水 ｝（後書き）

主人公は高校生くらいの思考力で考えれる説得で敵に挑みます

なので正直、いやいや相手も色々覚悟してんだしその説得で如何に
かなる訳ねえだろと言う話が持ち上がりますが・・・まあ追々と説
明するつもりです

五話 side キャロー

私を助ける為だったって事は分かってる

「キャロー！ごめんってー！ほんとあんときはアレが最善だったんだってー！」

簡易テントの外で雨水さんが私に謝っている

私を助ける為だったとは言えあそこまで言われるとは思ってなかった
雨水さんと私がなんの関わりの無い他人だなんて言っ
て欲しくなかつた

私達と仲良くしてくれた保護隊の皆と関わり無い同士だなんて言っ
て欲しくなかつた

「キャロー！お腹すいてるでしょー！ご飯あるから出ておいでー！」

更に言うなら食べ物で女の子を釣ろうとする雨水さんの根性が納得
できない

私はそんな食いしん坊じゃないです

「いりません！」

「え？ いらない？ キャロに食べて欲しくて愛情込めたのに」

「食べます！」

・・・あ

したり顔の雨水さんがオムレツを持って私の目線に屈んでいた

「うんうん、やっぱりキャロには食べ物だなー」

馬鹿な私を憎みます

目標のミッド行きの日

あれから仲直りをしたとは言え雨水さんも負い目を感じているようで一つだけ何でも出来る限りのことをしてくれと約束してくれた

「ありしたー！」

「ありがとうございました！」

「キョクルー！」

「おう！何時でも遊びに来いよ！」

私達は保護隊の皆に別れを告げてミッドで雨水さんの就職先探しの旅を始めた

「これより！局員認定試験を始める！」

「「はい！」」

料理屋。ホテル。一般企業。様々な所を巡ったが私と言う荷物持った雨水さんを雇ってくれる所は見付からなかった

そして私達は保護隊の皆を思い出して局員になってみようかと考えた

「まずはデバイスの起動！」

「セットアップ！」

「え？デバイス？ああ、さっきのかセットアップ」

私と雨水さんは局員の服装に変わる。たぶんセットアップ時の初期設定なんだと思う

雨水さんは驚いている。そう言えば雨水さんは魔法を見る度に驚いていた・・・あれ？もしかして魔法を知らないんじゃない

「次！射撃魔法！」

「はい！シュート！」

「んん？成る程、やっぱMPが足りませんかとか出そうだ。シュート！」

ポスンと音がして雨水さんの魔力弾は消えた。魔力弾の形成に失敗したんだと思う

「・・・次、儀式魔法」

「え？儀式魔法ですか？！」

「はい、小規模でも構いません。これはランクを決めるテストなので」

「はい」

私は詠唱を始める

横目でチラっとだけ雨水さんを見ると何だか壮大な呪文を唱えていた

・・・ただし魔力が全然通ってなかったけど

その後の色んな事が続く

「以上！終了です！」

結果

雨水さん 魔導師ランクF 非戦闘員 一般局員

私 魔導師ランクC レアスキル持ち 三等陸士

あれ？役職上では雨水さんを超えちゃった

「戦闘外要員って訳か、まあ別に戦闘したい訳じゃないから良いかな、キャラ口三等陸士殿」

「雨水さんのいじわるう！」

敬礼した雨水さんは何だか遠く思えた

私達が管理局入りして早一週間

本当早いな。私の召喚魔法はまだ未完なので戦闘では役立たずだけ
どデスクワークなら慣れたから結構イケてると思う

「よ！キャロちゃん！あれ？雨水は？」

同じ部署で仕事をする人達はもう気軽に私達と話してくれる

「雨水さんですか？さ、さあさっきお偉いさんと会ってくるって出
掛けましたけど」

「お偉いさん？ああ、アイツ情報整理や講師だけは得意だからな」

「そうなんですよ。雨水さん本人は他人任せ嫌だなーとか言っ
てましたけど」

「ハハッ、確かにアイツは教えるのは得意だけど自分はよええから
な」

「む……。」

「お？っとなぞ睨まんでくれて悪かったってキャロちゃんの彼氏

は強い強い」

か、彼氏?!

いや私と雨水さんはまだそんなんじゃない。まだ、そう、まだだよ!

「アッハハハ、ほんとに可愛いなキャラちゃんは。キャラちゃんは
ウチの部署の花だよ!」

雨水さん遅いなあ・・・今日は一緒に帰れるかな?

五話 } s i d e キヤロ } (後書き)

行き成り訳の分からない技術の魔法を使用しろと言われても当然不可能な主人公でした

六話 side 雨水

前回のあらすじ

仕事搜索 特に秀でた物の無いので中々受からず 仕方ないので局員になってみよう 魔力はあったが魔法は度下手 まあそれでも戦闘だけが仕事では無いので非戦闘要員として採用 デスクワークは初体験（高校生ですから） 中々不慣れだが万物は全て数字で語れり（痛々しいので自分では観察眼と呼称）を使いロストログニア専門の情報整理担当就任 我が後ろに道が有りけり。（一々痛々しいので講師の才と呼称）が何処かで発揮されていたのか何と無くアドバイスを聞いた偉い人がスカウトしにきた でいまの生活に至る

「たっ だいまー！」

現在俺は局の独身寮に住んでいる

まあ節約だわな

「おかえりなさい！」

「キュック！」

エプロン姿で出迎えてくれるキャラ口を見ると何時もながら感激してしまいそうになる

最近少し背が伸びたらしいし幼女扱いは悪いかと思うので今度から美少女と称そうと思う

とにかくこんな美少女がエプロン姿で出迎えてくれるなんて隣の同じ独身寮に住む同僚から唾を掛けられそうだ

「料理中だったか？って言うか今日は早いな」

「ん、ちょっと」

キヤロが一瞬だけ暗い顔をしたのを俺は見逃してはいなかったが今は放っておこう

美少女の料理が先だ

「あの、すこしだけ話をきいてくれますか？」

「料理が先だ」

「ええ?!」

あ、口に出す言葉じゃなかった

人間は誘惑に弱い生き物だと信じて疑わない！

「もう！雨水さんってば！」

「あははー、ごめんごめん。キャラの作ったご飯の匂いが凄い誘惑で」

「はあーなら食べながらでいいですから」

「うん」

俺が箸を進めるとキャラは俯いた状態でポツリポツリと話し出す

キャラよ・・・魚の目玉の部分をそうグリグリとしないでくれ・・・
ちよっとグロい

「じつは、今日もフリードの竜召喚をしっぱいしちゃいまして」

「ふえーひっはい、ほれはひゅごい（へー失敗、それは凄い）」

「ふざけてます？」

「ふえんふえん（全然）」

「食べるかしやべるかどっちかに」

「・・・。」

「喋るほうにせんねんして下さい」

え？せっかく食べる方を選んだのに・・・

って言うかさつきは食べながらで良いって言ったよね？

「そうだ！雨水さん！わたしに魔法制御をおしえてください！」

「ふえ？ふぁんで？（え？何で？）」

「まだ・・・いい加減にしないと、フリードが火をふきますよ？」

「ん？！んぐっ・・・ゴホッ、ごめんごめん、キャラのご飯が美味しいから」

「なら許します。つぎはないですけど」

やっぱり褒められるのは嬉しいのかな？

それからキャラがこれまで悩んでいた事を打つけられる

キャラのあんな泣き顔を見たのはたぶん始めて。俺はそんな急激なシリアスに耐え切れず

「フリードおお」

無言を貫いていたフリードに助けを求めた・・・アツサリ裏切られたけど

なんとフリードは俺とキャロと一度ずつ見て食事を再開した

「すみ、すみません！こんな、めいわくかけるつもりじゃなかったんですけど」

「気にすんなって」

「きいてくれてありがとうございます」

「おう・・・飯、冷めたか。まあ美味いから良いけど」

「あ、あた、あたためましゅ！」

ん？今更な気もするし冷えてても美味しいんだけどなー

「噛んだキャロ萌えー」

「フリードやつちゃって」

「キュクー！！」

フリードの口からギャグを通り越した火力の炎が飛び出した

こんがり上手に焼けました？

最近キャラの俺に対する扱いが若干乱暴な件を一体何処に相談した
べきか考えながら先生と呼ばれるのも慣れた今日この頃

「良いか？キャラ、そもそもお前のフールド制御ミスは技術面では
なく精神面が弱いせいだ」

「はあ」

「でその強化を図ろうと俺は考えているんだが当然策はある」

「たよりになります！」

「おう！」

俺は昨夜の内に纏めておいた資料と訓練メニューを渡す

この時の俺は講師の才を完全に舐めていた

六話 ｝ s i d e 雨水 ｝ (後書き)

原作よりキャラ口が少し強くなります

七話 side 雨水

前回のあらすじ

寮帰宅 キャロ可愛い 美少女から美少女にランクアップ キャロ可愛い 魚の目が放送禁止な感じに キャロ可愛い 相談を受ける キャロ可愛い フリードに焼かれる キャロかわ・・・ キャロに講師開始 で・・・

「後悔先に立たず」

「あははっ秋春！おもしろーい」

目の前にはキャロ似のナイスバディのお姉さんが立っている

この状況を作った原因は俺にある

ほんの些細な事だった

特典能力の一つ。若き日の思い出、老い日の勇姿。（年齢操作と呼称）を試そうと思ったただけだ

そして身近な実験台がキャロだったただけだ

「えと、キャロ・・・さん？」

「ん？どうしたの？秋春、変な物でも食べた？」

近ッ！近い近い

こんな美女に迫られるなんて想像もしなかった

ってかキャラ口って成長したらこんなんだ

「なるほど、年齢操作は肉体だけでなく精神も成長させれるのか」

「ん？つと言つか秋春ちよつと若くなつた？」

「お前が年老いたんッ！」

殴られた

しかもグーで

「あ・き・は・るうゝ？女の子に老けたなんて禁句だよ？」

「ちょ！ま！なにその魔力パンチ！」

「え？秋春が考えたんじゃない・・・ほんとに如何したの？今日の秋春変だよ？」

そもそもさつきから呼び方が秋春って親しくなってるし

「えつと俺達ってどんな関係だっけ？」

「え？」

笑っていたキャラの顔がどんどん曇って涙を流し始める

「ごめん！ほんと！話を聞いて！」

泣き止まないキャラに如何にか今までの経緯を説明する

暫らくしてようやく理解出来たのかキャラは納得顔になった

「あー、それで若いのね・・・ん？だとしたら私にとって此処は過去って事？」

「え？あ、そうか」

「へー秋春にそんなレアスキルがあつたんだ」

「で？俺とキャラの関係は？」

「それは秘密！だってそうしないと詰まらないでしょ？」

密着した時に当たった柔らかい感触が何とも言えず顔を赤らめてしまった

「ん？あー！秋春ったら、ふふっそう言うところは一緒だね」

「・・・あ、そう言えばフリードの制御は上手くいってるか？」

「え？あーあの時の・・・あははっ！安心して！秋春は教えるのは天才的だから！」

「のは？」

と言う事はやはり俺本人は余り強くはなってないのか

失言と気付いたキャラはバツと顔を背けてアハハと苦笑い

「さて、そろそろ戻してよ。このままだと色々ウツカリ喋っちゃいそうだから」

「分かった」

「じゃあね、秋春」

この後のキャラにさっきまでの記憶は無く本当に成長を遂げていたようだ

前回の実験で自分の能力をある程度把握し、改めて俺TUEEEが実現できない可能性アップを実感した

「はあー」

「うーす、どした？雨水」

「おお、ヒューズか」

コイツはヒューズ。俺と同じく非戦闘要員で同じ部署の同僚

「いやほらキャロみたいな小さい子までもが戦いの場に出てるのに大の大人の俺らがなーっと」

「ハハッ、そればかりは仕方ないさ。でもお前さんはまだマシだろ雨水先生！」

「あんまり好きじゃないんだけどな、その役柄」

バンバンと強く背中を叩かれ渋々モニターに視線を移す

隣ではヒューズも俺と同じくらいの速さで仕事をしている

「そいやお前管理局のエースって知ってるか？」

「あ？知らん」

「だよなー、お前さん辺境の地の出らしいし」

「るさい」

「わりいわりい、何でもリンディ提督が持ってきた若いエースで入りたてで局員をバタバタ薙ぎ倒してるらしいぜ」

「そりゃ・・・なんて言うか・・・」

「恐ええな」

「ハハッだな。俺達には縁の無い話だ」

「ん？つと時間だ、行ってくる」

「外回りか？」

「士官学校に講師だよ」

「ガンバ雨水先生！」

まったくこんな年の人間に講師だなんて管理局はよほど人材不足らしいな・・・って勤めてみてそれは身に染みる程分かってるんだけどな

七話 ｝ s i d e 雨水 ｝ (後書き)

年齢操作は下手に自分に使い若返らせちゃったりすると転生前に戻って戻れなくなるので基本他人掛けのスキルになりそうな予感

感想お待ちしております！

八話 side キャロ

どうも、局勤め一年のキャロ・ル・ルシエです

何故か私が訓練所を破壊しているといまエースと名高い人の目に付いたそうです

本当に世の中不思議です

「始めまして」

「は、はじめ！まして！」

「リラックスして。ね？」

「は、はい！」

金色の長い髪の柔らかい笑みをしているこの人。確かフェイト・テスタロッサ・ハラウン執務官って名乗ったはず

なんで執務官なんて偉い人がいまだ三等陸士の私に声を

「えつと確かキミは週に一回くらいのペースであそこで練習してるよね？」

「え、あ、はい。何時もすみません」

本当は毎日にもでも行きたいけどあの迷惑そうに見る目がちょっと恐い
まあ何時も訓練所を滅茶苦茶にしてるんだから迷惑そうにされるの
は当たり前だけど

「あ、頑張ってる姿みてたよ」

「ありがとうございます」

「凄いね、その年で努力家だ」

「いえ、ぜんぜん成長してませんから・・・」

「そんな事ないよ、少しずつだけど確かに成長してる」

この人の言葉は嘘でもないし冗談でもないし自然と分かる。そんな
感じの声色をしていた

何だかタイプは違うけど雨水さんを見ている気分になってきた

雨水さんもこんな風に包み込んでくれるタイプの人だ

「あ、あの、わたしの用があったんじゃ」

「そうだった」

ポンとうっかりしていたとした仕草は少し天然っぽくて可愛かった
雨水さんには合わせないようにしようっと

「もし、キミがよかつたらで良いんだけど・・・」

「？」

「家族に、なりたんだ」

「はい？」

このひとはなんと？

かぞくになりたい、かぞく、かぞく？ファミリーの事だね、うん

「えと、その、あ・・・はい？」

「ごめんね、混乱させちゃった」

「い、いえ」

「実は少しキミの事を調べさせてもらったんだけど保護責任者が登録されてなかったから力になれないかなって」

ごめんなさい。その理由だとイマイチ分かりません、私に保護責任者が居なかったとして何故貴方がその保護責任者を名乗り出ようと思ったのか

私を手に入れた時のメリットとか無いですよ？家事は得意ですけど

「な、なんで私なんですか？」

「？」

「私がいにも孤児なんてたくさん」

執務官は少し寂しそうにして笑った

「ただ、うん、そう。ただ此処で練習をしているキミが寂しそうだ
ったから・・・それを放っておけるほど私が良く出来てないって感
じかな？ただの自己満足だよ」

此処での私が寂しそう？

それはそうだ・・・だって此処には雨水さんが居ないんだもん

「そ、そうだんしてからでも良いですか？」

「そうだん？」

「旅仲間に」

「え？」

今更だけど私と雨水さんの関係を人に教える時、旅仲間くらいしか無いのに気が付いた

私は雨水さんと一緒に住んでいる男性独身寮に帰るとすぐに今日の事を話す

「へーそんな物好きが居たんだな」

「ものずきですかっ?!」

「うん、ほら子供一人を育てるのって結構大変らしいし」

あれ？もしかして今日の雨水さんはちょっと真面目モード？

「んーそうか、訓練所の破壊を参考に所が引つ掛かるな。アレか？誘って来たのはテロリストか？」

「・・・フリード」

「ちょ！止めるフリード！俺は治癒魔法とかは無理なんだ・・・うわあああ！！」

あんな優しい人をテロリスト扱いなんて信じられません

そんな人はフリードの炎で丸焼きにするべきなんです

「さて、もういいですか？」

「あ、ああ、悪かった。テロリストでも人だもんな、きっと不良が猫を拾う感覚なんだろうよ」

「フリード」

「冗談！冗談だって！悪かったって、ふーん。テストロッサ執務官って言えば近頃噂のエースかヒューズから聞いた」

ヒューズさんから？最近私は雨水さんとは部署が違う場所になったからヒューズさんとも会ってないな

お菓子とかくれる良い人だったと思う

「別に良いんじゃないか？キャラが良いって思うなら」

「でもここは出て行くかもですよ？」

「局員同士だし会える時には会えるだろ・・・それに、今は平気で
も後々保護者が居ないってのは不便だからな」

本当は雨水さんに家族になって貰いたいけど雨水さんは父親って感
じじゃないですね

お兄さんは近いかもですけど偶に私の方が年上なんじゃと思う時と
があるし

それに私の目標は雨水さんのお嫁さんですしテストロッサ執務官の
申し出は渡りに船では無いか？

戸籍登録上他人なら結婚年齢になれば可能です

「よし！決めました！」

「おおー、で？如何するんだ？」

「わたし！テストロッサ執務官の子になります！」

「なら今度会った時に名前で呼ぶ許可を貰うんだな。名前で呼ぶつ
てのは親しい証だからなキャロ」

「分かりました！雨水さん！」

・
・
・あれ？私って雨水さんの事は苗字で呼んでません？

八話、side キャロ、(後書き)

今更ながら苗字で呼んでいる事に気付くキャロでした

九話 side フェイト

キャロ・ル・ルシエ。私があの子を見掛けたのは二ヶ月くらい前の事だった

あの子は週の終わりに訓練所に顔を出し迷惑そうな大人に何度も頭を下げた場所を借りていた

何でそこまでするのかとても気になって訓練の様子を少し見せて貰う事にした

あの子の目はとても真剣で何か一つの目標に向かって走っているような、昔の自分と被るような気がしてならなかった

そして訓練後に見せる寂しい気な顔がとても印象に残った

だから私は悪いとは思ってながらあの子の経歴を調べさせて貰った

小さな村の出身で村を追放された所を自然保護隊に保護されミッドで局員試験を受けて見事合格 現在保護責任者無しの孤児扱い 住んでいる場所は×××部署の男性用独身寮

「？」

何で男性用の独身寮に？

まあ流石に小さい子一人で生活はって事で多分保護隊の方の多い寮に居るんだろう

私は何度も見掛ける内に声を掛けたくなくなった

力になりたいって思った

だから保護責任者を名乗り出た

あの日から丁度一週間。多分今日もあの子は訓練の為にやってくる

「テストロッサ執務官！おはようございます！」

「おはよう・・・えとキャラotte呼んでも良いかな？」

「あ、はい！もちろんです！・・・そのわたしもフェイト執務官って呼んでも良いですか？」

「もちろんだよ！」

キャラは嬉しそうに笑うと訓練所の中に入る

そして真剣な目をして独自の訓練メニューを見ながら訓練を開始するん、どんなメニューでしてるんだろ？

「え、えとキャラ？」

「ふえ?! フェイトさ……じゃなくてフェイト執務官?!」

「さんで良いよ」

キャラのすぐ隣に展開されているモニターのメニューを読んでいる

・・・凄い

かなり考えて作ってある。模範的なメニューじゃなくてキャラの為だけのメニューって感じ

「これ、キャラが？」

「い、いえいえ! これは雨水さんが」

「雨水さん？」

何処かで聞いたような

とっても最近だったような

「前にはなした旅仲間です」

「あー前も思ってたけど旅仲間って？」

「わたしが村をですぐに出会ったひと？」

「自然保護隊の人？」

「ううん、わたしとおなじで帰るところがないって言ってた」

それから少し話を聞いていたが段々キャラも「あれ？」と首を傾げる事が多かった

今度会って見ようかな

「あ！そうだ！フェイトさん！」

「あ、はい、なに？」

「こ、この間のはなし！」

ドキリと緊張する

もし断られたら如何しよう

「わたしを！フェイトさんの家族にしてください！」

「・・・良かったあー」

キャラは少し安心して気が抜けた私を心配そうな目で見ている

「だ、だいじょうぶですか？」

「うん、大丈夫、嬉しくて。ちょっとね」

「よかったです」

今日にでも手続きしないと

あ、それに雨水さんにもやっぱり会わないとな

キャラの正式な保護責任者になったのは申請を通した次の日で実際の所は何か変わった訳ではないので少し現実的な実感には欠けます

だけどいまの私の緊張の度合いは稀に見る度合いです

恐る恐るインターホンを押す指が震えます

「ふあゝヒューズか？こんな朝っぱらから」

キャロの住んでいる住所から出てきたのは私と同じくらいの年の男性
多分、雨水さんだ！

「あ、あの！始めて！フェイト・テストロッサ・ハラオウンで
す！この度はキャロ・ル・ルシエさんの保護責任者にならせて頂き
ました！」

「・・・あん？」

雨水さんは目を細めて目を擦る

そして私の顔をジックリ見ると一旦扉を閉めた

「あつ」

もしかして嫌われた？！

そう思っていたが中から何か楽しそうな声が

『キャロ！なんかお前の母親？いんぞ！』

『フェイトさんはお姉さんです！』

『つか来るなら言えよ！何も準備してねえって！アイツ執務官な

んだから俺って失礼したらすぐ首飛ぶって!」

『あははっ! フェイトさんはそんな事しませんよぉー』

『嘘だ!』

『・・・フリード』

静かになった・・・歓迎はされてるよね?

「おはようございます! フェイトさん! いま雨水さん起きたばかりでシャワー浴びてますから入ってゆつくりしてください」

キャラが笑顔で扉を開けて出てきた

それは良いんだけど何時もキャラと一緒に居る、子竜のフリードが何か啜えてお風呂場らしき所に連れて行ったのは見なかった方が良いのかな?

九話 ｛ s i d e フェイト ｝ (後書き)

主人公の組織的地位は最下層付近なのでエースで執務官なフェイトには頭が上がりなかつたりします

十話 side 雨水

前回のあらすじ

早朝インターフォンで目を覚ます ヒューズと思い込み扉を開けると執務官殿 寝起きの状態なんてかなり失礼な状況で焦る 取り合えずキャラのせい にしてみたらフリードが火を吐いた 次に起きたのは顔面にお湯を掛けられてから 即効身支度整え再度玄関に居ない・・・ ほっとしてリビングに戻ると座っていた

「キャラ・ル・ルシエさんを私に任せて下さい！」

目の前にガチガチに緊張したテストロッサ執務官が座っています。どっちが上司なんだか分かってるのか？この人は

「ようはキャラを奪いに来たと・・・ふふつやれるものならやってみろ」

「ええ?!」

「雨水さん。いったい何時からねてたんですか？」

最近キャラが恐いです

「ゴホン、冗談はさておいて。キャロの事は有難う御座います、そして宜しく願います」

「え？あ、こちらこそ」

「さて、ところで今日はどのような用件で？」

敬語も出来る高校生なんだぜ！・・・これであってるかは知らんが

「あ、いえ、ただ挨拶をと」

「そうですね、それは光栄です。お噂はかねがねですよエースさん」

「恥ずかしい限りです」

「ところで些細な事ですけど何故キャロを引き取るうと？こつ言つては変ですが変わり者ですね」

いや、マジで訓練所を破壊してる所を見掛けてスカウトとかクーデターでも考えているのではと思っても仕方ないよね？

「その、なんて言いますか。放っておけない感じだったので」

「なるほど・・・百合な方？」

「なっ！違います！」

「ではキャラは嫌いっ」と

「ちがつ！違うよ！違うからね！キャラ！私は大好きだよ？！」

「え？あ、はい知ってます」

「ほほう、やはり執務官殿は幼女好きっ」と

何だかこの人、面白い人だな

あわあわと俺とキャラを交互に見るテストロッサ執務官は割と普通の女の子って感じだった

あ、そう言えばキャラ幼女は撤回してるんだった

あれからテストロッサ執務官殿とは割と仲良くなった。あ、フェイトって呼べてって命令だったな

キャラはと言うとフェイトさんの所と俺の所をウロチョロとしている

「死ね！」

「唐突だな」

「お前なんか死んじゃええ！」

何時もは冷静情報収集担当のヒューズ三等陸士

なんだか今日は情緒不安定みたいだ

「武装隊の花のテストロッサ執務官とお話なんて死んじゃええ！」

「お前も先日話しただが」

「アレは仕事だ！そしてお前のはプライベート！全然違う！」

「分かった。お前がフェイトさんのファンと言う事は何だか凄く分かった」

メンドクセエ

報告ですが、晴れて何かの功績で俺も三等陸士にランクアップ・・・
ってこれが一番下位の階級名なんだけどね

キヤロは二等陸士に昇格してたから結局俺の上官？に当たる位置だし

「にしても気を付けろよ」

「なんだよ、急に真面目に」

「ああ言うエリートの上りは危険が付き物だ、キャラちゃんはまだ幼いし正直現場には早い」

「……。」

昔はキャラも同じ部署だったから心配なようだ

アップダウンの激しい奴だな？

「幾らテストロッサ執務官が保護責任者になったからってキャラちゃんにとって頼れるのはやっぱりお前さんなんだからな」

「るせい。分かってるやい」

だから俺だって少しは訓練してんだろうが……全然成果でねえけどマジで何で他人の指導はこんな上手いのになそれを自分に応用出来ないかなー

あの特典他人限定と違って縛りでもあんのか？

「羨ましいなー！なー！俺と変わねえか？」

「……そうだな、俺がフリードの餌食になっている瞬間だけ変わってやるよ」

「そっちは遠慮」

ヒューズと暫らく喋っていたら上司に後ろから書類で殴られた・・・
あのハゲエ

十話 } s i d e 雨水 } (後書き)

今後の参考までに聞いておきたいのですが、オリキャラは増やすべきでしょうか？

お気軽にご意見投票、宜しくお願いします！

十一話 side 雨水

あらすじ

キャロの保護責任者が正式にフェイトさんに決定 フェイトさんが挨拶に来る なんか素直でからかうと面白い からかい過ぎて次の日首飛んでないか少し不安になる 心が広いのかそんな事はなかった ヒューズに恨まれる ちよつとシリ阿斯 で親睦を深める為に遊びに行く事になった

「うーっす、待ちました？」

「全然待つてないよ」

「おなじくです」

「雨水さん！じょせいを待たせるとは何ごとですか！」

「キュックルー！」

フェイトさん、謎の少年、キャロ、フリードの順でお送り致しました

「二人対一人でそんなに待つてないで決定だな」

「キュクー！！」

「お前は竜だろうが」

竜の数え方は匹だ！・・・たぶん

「ハハ、それじゃ行こうか」

「ですね、それにしても親睦深める為に遊園地って子供みたいな発想だな！流石キヤロ」

「え？これってたしかフェイトさんが・・・」

ん？

「こつこども・・・かな？」

「フリード」

「キユク」

え？俺なんか悪い事言った？

流石のキヤロもこんな所でフリードに炎を吹かせる事はなかったが代わりに噛みつかれた

「雨水さんっておもしろいですね！」

「そうか、まあそれは良かった・・・ところでお前誰よ？」

「え？」

「いやいや、そんな悲しそうな顔をされても俺ってお前から自己紹介もされてねえんだぞ？」

「・・・雨水さん」「

女性陣から冷やかな目が

「いやいや！待って！俺そいつの名前さえも聞いてない！」

「・・・あ」「

ようやく知れたがコイツはエリオ・モンディアル。フェイトさんが保護責任者を引き受けた子供らしい

まあキャラ（男ver）ってところか

「なるほどなー、一応知っていたみたいだか。俺は雨水 秋春な。さつきみたいに雨水でも、いっそ秋春でも好きに呼ぶが良い」

「秋春、兄さん？」

「「え？」」

「え？」

何故か見詰め合う女性陣とエリオ

え？え？なに？・・・あ、そう言えば俺を名前で呼ぶのってエリオが始めて？

「ジェットコースターがー久々だなー」

「の、乗るの？雨水さん」

「早そうですね」

「楽しみです！秋兄さん！」

フェイトさんとキャラは恐る恐るか。ま、そんなもんなのかな？

って言うか秋兄さんってちょっと微妙くないか？秋兄か兄さんかどちらかに別けるべきじゃないか？

ジェットコースター

「きゃあああああああ！！」

「いやっほー！！」

「はい！はいです！」

お化け屋敷

「きゃあああああああ！！」

「やっぱり作りもんだな」

「張りぼてですか？」

コーヒーカップ

「きゃあああああああ！！」

「そんなに早くないと思うが」

「回る！回る！回るうう！」

ウォーター 슬라이ダー

「きゃあああああああ!!」

「水ウゼエ」

「濡れますね」

巨大ボールプール

「きゃあああああああ!!」

「これは叫ぶ所か? つかボール痛っ。エリオ! テメエか!」

「アハハ! 楽しいですね!」

カフェテリア

「はあはあ、ゴホゴホッ」

「お前ら叫びすぎだ」

「だ、大丈夫ですか?」

カフェの屋外テーブルでくたあーと女性陣二人は倒れている

ん？叫ぶ様なアトラクションは俺的には最初の二つくらいだったか

「あゝくゝ、雨水さんってタフですね」

「キャラはともかくフェイトさんまで？」

「エリオは元気だね」

「フェイトさん？僕もつかれましたけど。楽しかったですから」

昼食が運ばれると俺とエリオは食べるが二人はまだ復活してない

ってかエリオの食べている量が異常だ・・・フェイトさんが払って
る食事代とか凄そうだな

「あれだな、フェイトさんは良い人だな」

「え？行き成り如何しました？」

「いや、なんでも」

こう言う時は男が払うべきだと意地を張って見たがやっぱ凄かった

一ヶ月分の生活費と同じくらいはあったぜ？

十一話 〽 side 雨水 〽 (後書き)

エリ才登場！

十二話 side エリオ

雨水 秋春さん。通称、秋兄さん

今日はフェイトさんもルシエさんも一緒では無く二人同士、男同士で会う事になった

「うああーだるうー・・・早いな」

ネクタイを緩め眠そうにしながら片手をパタパタして歩いてきた

反対の片手には仕事荷物を持っている

「ごめんなさい、急に・・・」

「ん？ああ、いいさ。待たせて悪いな、その辺の喫茶店で良いだろう？」

「はい！」

人は居るけどそれ程混んで居ない喫茶店を選び入る

「あー、で。何の用だっけ？」

「その・・・雨水さんが様々な場所で講師をしているって本当ですか？」

噂に聞いた話では訓練校や難関の士官学校を始め陸士部隊や武装隊の実戦部隊、教導隊のエリート部隊の所まで幅広く活躍していると聞いた

「講師は本当だがエリオが思っているような感じじゃないぞ？」

「？」

「んーっと、たまーに呼ばれては優秀な生徒いますか？とかこの子が最近伸び悩んでいるんですけどか持ち掛けられる程度だ。本職はロストロギア関係だしな」

つまり生徒を見定める選別眼と的確なアドバイスが出来るって事ですよね？

十分凄いやうな・・・それで本職は危険物のロストロギアって・・・

「あ、あの秋兄さんから見て僕ってみこみますか？」

「見込み？なんの」

「まどうしのです」

秋兄さんは何だか面倒そうな顔をして右肘を付く

き、気分悪くさせてしまったのかな？

「それは、フエイトさんの為とか？」

「それもあります」

「も？」

「はい、僕もルシエさんのがんばってる姿をみせてもらいました。そして僕ももつとがんばりたいと思ったし秋兄さんに追い付きたいって」

「あーあーあー」

楽しそうに首を何度も縦に振って携帯端末からモニターを表示させた

そこにはこう書いてあった

ロストログア鑑定士 魔導師ランクD 雨水 秋春

「くははっ、追い付くってエリオの魔導師ランクは平均的に見てC以上は行uksi魔力変換資質の電気も持ってる。既に追い抜いてるって」

「え？え？」

あれ？魔力変換資質の事言いましたっけ？

「いやーまー、追いつくって言っても分野が違っからなー。エリオは戦線部隊になると思うよ？向いてるし、近代ベルカって事は騎士になるんでしょ？」

「な、なんで、しってるの？！」

「アハハッ！俺はエリオより複雑なロストロギア相手に鑑定師をしてるんだぜ？大体分かるって」

やっぱり秋兄さんは凄い

僕の将来の目標には十分な人だ

「ん、意外と美味かったな。此処のケーキ、キャロに持って帰るか」

あれから話し込んでしまっただ方になってしまった

「フェイトさんにも買っただ方が良いでしょうか？」

「あーそりゃーもちろん。代金は持ってやるからフェイトさんの好

きそうなのを選びな」

「ありがとうございます！」

フェイトさんは忙しく僕の住む保護施設に来れる時間を作るのを精一杯、それは分かっていたけど僕は遅くまで起きて持っていた

「エリオ！」

「フェイトさん！」

面会時間はとうに過ぎていた、だけどフェイトさんはやってきてくれた

僕はそれが嬉しくて今日の話を元気良く語った

「雨水さんには今度お礼を言わなきゃね」

「はい！」

「あ、ケーキ。ありがとね、エリオの選んできたの美味しかったよ」

「あ、い、いえ」

いま思っただけどフェイトさんと秋兄さんは何処か似ている

フェイトさんは包み込むように優しく凍った心を暖かく溶かしてくれる

秋兄さんは荒々しくてちょっと乱暴だけど優しく飲み込むように全てを受け入れてくれる

どちらも優しい、信じられない程に優しい、勿体無いほどに優しい

「フェイトさん」

「なに？」

「僕、魔道師テストをつけてみます」

だから僕もそんな二人みたいな人になる為に魔導師になりたい

十二話 side エリオ（後書き）

現段階の役職	本職	ロストロギア鑑定士	副職	アルバイト
講師				

十三話 side 雨水

前回のあらすじ

エリオに相談を受けた あれ？俺ってこんな子供により弱いのか
何故か目標にされる ケーキ食う 意外にも美味しかったからお土産に持って帰る キヤロ、ケーキ気に入った・・・でもカロリーを気にしてたっぽい 終わり

ああ、何気に既に入局二年くらいか？

今日の仕事は第四陸士訓練校で特別講師を頼まれた

「えー・・・第四陸士訓練校の生徒の皆さん。今日は少しの時間ですがお願いします」

あー面倒だ

広さは一般学校の体育館くらいだろう

生徒達は直立不動、疲れないのだろうか

「魔力と言うのは確かに多ければ多い方が良いです。がしかし術式の改良等で同量の魔力である程度魔法の強弱を付ける事が出来ます・・・なので魔力量が少なくとも強大な魔力持ちに完全に太刀打ち出来ない訳では無いです」

表示されるのはミッドチルダ式の魔法陣。最近は近代ベル力と言った新しい形態が出始めカートリッジシステムも確立されてきた頃で魔法技術の進歩は目覚しい

ちなみに俺の魔法形態はミッド式・・・なんだけど使えるのはせいぜい初歩的なのを数個

これでも訓練は人並みにしてるんだけどなー

「飛行魔法に必要なのはイメージです。魔力を通すのは部位ではなく体全体です、放出系の魔法に分類されるので飛行中は常に魔力を消費します。しかし覚えればそれは確実に戦闘の際には有利になります」

浮遊だけなら大したモノではないが飛行となると違ってくる

飛行の代わりに別の魔法を代用してくる魔導師も居るらしい。でもそれは大概はレアスキルや先天技術

「と言ったように基本的な魔法とはインテリジェントデバイスが頑張れば自動詠唱出来るレベルです、魔力消費も少なく威力も当然低いです・・・ですがこう言った基本こそ応用の幅が広く使えます・・・ん？あ、そろそろ時間でした。では今から質問の時間に移りますね」

にしてもこんな弱そうな人間が偉そうに語ってると思うと笑えるな
ーとか考えていると物凄くイライラしてますと表情で分かる生徒が
突っ掛かってきた

「先生の魔力ランクをお尋ねしても？」

「ん？Dくらいだったか、たぶんそんなくらい」

予想外の低さだったらしく少しざわつきが入る

んー先にある程度の情報を渡してくれれば良かったのになー

「Dって・・・って何でそんな低ランクが、と言うかDって魔導師
として成立するの？よくテスト受かったわね」

仕事仕事我慢我慢

「あん？んだと？おい、魔力ランクが魔導師局員としてのレベルを
決めるものじゃないって知ってるか？」

・・・あれ？我慢するつもりだったんだけど

よし！流れに任せて進もう！

「それは教わりましたが限度があります」

「ほほお？ 限度ねえ、ならお前は俺より強いのか？」

「ええ」

「表に出ろ！」

「ええ！！」

・・・周りの視線が少しだけ痛かった

目の前に立ったのはオレンジ髪の少女だった、訓練生にしては珍しく自作デバイス

俺達は勢いのままにリアルに表の訓練場に出た

周りの教師が何も言わないところを見ると周りも俺の力を見たかったらしい

「名前を聞こうか？」

「ティアナ・ランスターです」

「先手は譲ろうかな」

「そうですかつ！」

開始の合図になると銃型のデバイスの先が向けられシューターが発射される

三発 誘導弾 二発は前から挟み込むように来る圏で一発を背後からの本命

観察眼の情報を整理し動きを読む

来る場所さえ分かっているれば速かろうが遅かろうが一緒だ

それに誘導弾は速さを追及した弾では無い為、感覚的にはドツチボールハード版

「つとギリギリッ！」

身体能力の高く無い俺としてはかわすのさえ難しい現実的に考えてかわせる限界は四発くらい・・・あれ？挑発しといてなんだけど、ヤベエ！

十三話 side 雨水 (後書き)

少しティアナにしては冷静な判断に欠ける行動と思われたかも知れませんがこれには事情がありまして・・・

当初スバルが元気良く勝負を申し込む設定だったのですが戦闘機人に勝てる要素が無い！と気付き急遽身体能力平均並みのティアナに白羽の矢が立った訳です、はい

なので少し違和感があるかも知んですがご了承を

十四話 side ティアナ

最近の私は少し人間関係が面倒で疲れていたのか何時もなら冷静に流せるはずの事を受け止め無駄に起こってしまった

なんでこんな事に

私は割と手加減せずに特別にやってきた噂の講師にシューターを放っている

「アブナッ！」

講師の方は私の攻撃の位置を何かで先読みしているような動きを見せる

そのせいで段々と私も熱が入る

先読みされているなら全方位射撃で・・・

「うし！いまだ！」

私が同時射撃の為にタメに入った瞬間私に向かって走ってくる

行動の先読みじゃなくて思考の先読み？

考えないと・・・ああ、もう、観客が鬱陶しい

「マルチタスク。あーなるほど思考の先読みと思ったから思考を分割したのか」

歓心したような声を出した。次の瞬間、単発の威力の低いシューターが連続で地面撃ち土煙を発生させられた

目暗まし？

私は標的をズラす為に幻影シルエットを使う

「シルエットかあー、つくづく訓練生にしては実践に慣れてるなー。いや、実戦を常に想定していたのか？」

なんだかこの講師の言い方は私を見透かしているようでイライラする

「発見」

気付かった。講師の人が行き成り目の前に現れデバイスを持っている方の手を捻り上げられる

「痛っ、痛たたっ！痛いです！」

「あははっ！ごめんねー、俺ってバインドまだ未完成でさー」

バインドが未完成ってどんだけ魔法下手なのよ！

魔法無しの力では流石に男の講師には勝てない・・・まさか魔法外の手を使ってくるなんて

「うん！魔法戦って言ってないし良つか！」

「痛い！痛い！いい加減放しなさいって！」

「優等生っぽい顔して酷い言葉使いだな」

段々と手の疲れ力が抜けてデバイスを落としてしまう

講師の方は私のデバイスを拾って少し観察するように見詰める

「高そうなパーツだなあ」

「返して！かえ、痛たたッ！！」

取り替えそうと振り返ろうとしたら余計に腕が捻り痛かった

「射撃と幻影かー、なんて言うかセンターガードに最適な人材だな」

「褒めてます？」

「あれだな、キミみたいに可愛い子をこんな風に捕まえてると俺が変態みたいだー」

「放さないと呼びます」

パツと放した

瞬間的に魔力弾の形成も考えたが集中力が散漫になっているせいで上手く出来ない

「さて、俺の実力はこの程度だ。そもそも俺は卓上で教えるのであってこういった実戦訓練は苦手なんだよ」

勝っておいてそれはム力つく

私より断然に魔法が不得意なのにこれだから才能持ちは・・・
レアスキル

「いーなー才能持ちはっ。俺も魔法使いてー！」

「え？」

「ん？どした？」

この後、すぐに訓練校の教師が割り込んできたので話す事が出来なかった

訓練校から寮まで帰り、最近やたら付き纏ってくるスバル・ナカジマと一緒に帰っている

「どうしたの？今日はティアらしくなかったけど」

このスバルとは名前で呼ぶくらいには仲良くなっている。二人とも訓練校では珍しい自作デバイスだったので自然と仲良くなったんだと思う

「そうでもないわよっ、だってDランクとか可笑しくない？」

「ま、まあそれは私も思ったけど」

「それにあの講師の人の動き。ちょっと変だったのよ」

行動の先読みでも思考の先読みでもなかった

でも最初から攻撃の来る場所が分かっていたかわせる最善の歩数や体制でかわす

いったいどんなレアスキルなんだろうか

「変って失礼だな」

「って！講師の人！」

「なんでこんな所に」

此処って一応女子寮行きの道なんだけど・・・警備員を呼んだ方が
良いのかな？

十四話 side ティアナ（後書き）

今回のティアナの敗因は

威力とコントロール重視でシューターの数を減らした事

訓練所が屋外で土煙が発生しやすかった事

拘束された時にシューターから意識を外した事

の計三つくらいかな？とか思っています

どれも次の機会には克服されてそうで雨水の勝ちがギリギリだった
と言っのを分かってもらえたかなと思います

十五話 side 雨水

前回のあらすじ

第四陸士訓練校 それっぽい話を 少女に絡まられる 騙し騙し勝つ その後社交辞令的に訓練校教師と話して帰る 道に迷う 見知った少女発見 自分の話と気付く 話し掛ける 警備員を呼ばれかけた

「ってな訳で道を教えてくれない？」

「……。」

何故か微妙な表情で見られた

「何であの道を迷うんですか」

今日絡んできた方の少女が呆れたように息を吐きながら言う

隣の子は一応フォローっぽい事を言っているがイマイチフォローとは思えない

「仕方ないだろ？そいや、俺が変わって何処が？」

「私の射撃魔法をかわしていた時ですよ。行動や思考の先読みにしては動きは遅く、かと言って魔法が放たれている場所は分かっているようにかわす・・・変ですよ、咄嗟に判断したとでも？」

「んー、本当に凄いね、将来は執務官とか希望してるの？」

あの役職は無駄に高いスキルを要求されるからなー

フェイトさんも抜けた性格だけど仕事ではかなり優秀でエリートだったし

「希望しますが何か？」

「合ってるなって。えーっとティアナ生徒だったな、そっちは？」

何だか聞いてはいけない感じだったので、すかさず隣の子に話題を振る

「え？え？スバル・ナカジマです！」

「スバル生徒な」

「元氣そうな子だなー・・・と言うかこの子も自作デバイスか。流行ってるのか？」

やだなー

自作デバイスって自分で色々魔法組んでる子が多いからメンドクサ
イんだよなマニュアル道理に出来なくて

「雨水先生でしたよね？」

「そそ、でどうしても良いけど帰り道どっち？」

「あっちですよ」

今来た道を指された

全くの逆を歩いていたのか、途中に地図等が無いから全然分からな
かった

「ん、ありがとう」

「いえ」

「じゃ、今度局であつたら声掛けてなティアナ生徒にスバル生徒」

「だうあー」

「あれえゝ？雨水さん帰ってたんですね」

「まあーなあー」

自宅でゆったりと疲れを取っているとキャラコが帰宅する

キャラコはピシっとした局服を着込んでいて肩からショルダーバックを下げていた

どっかのOLみたいだ

「老けたな」

「・・・フリード」

プロテクションを張ってみたがアッサリと破られ丸焼けにされた
そしてフリードは慣れた仕草でグタつとなった俺を俺の部屋に放つ
て着替えると言いたげに鳴いた

「あいあい、お前が焼くから服がどんどん無くなるっの」

「キュック」

「まあな、確かに命令してるのはキャラコだし文句ならキャラコかー」

「キユウウ」

「ああ、少し恐いな」

早々と着替えてリビングに戻ると既にキャラは私服に着替えてソファに座っていた

「雨水さん、そうだながあります」

「相談？」

俺はキャラの目の前に正座する・・・あれ？普通逆じゃね？

真面目な話だと自然と正座で聞こうとする辺りは教育の賜物と言う奴なのだろうか

「うん、私、自然保護隊にいいところかと思うんです」

「ふーん、いつてらっしゃい」

「・・・フリード」

何故に?!

「待て待て！キャロ！話合おう！」

「・・・ですね。そうだと言うのは、その、あの、雨水さんいっしょに、つい」

「え？なんて？」

「その、一緒についてきて・・・くれないかな？って」

「は？やだよメンドイ」

いまの部署気に入ってるし移動願い出すの面倒だし、何より俺はそこまで自然大好き人間ではないので保護と言われても他人事にしか思えない

「い、いいじゃないですか。恩もありますし返しましょうよ」

「まあ確かに恩返しは大切だよな・・・ん？フェイトさんには言ったか？」

「まだです」

そう言うのは保護責任者のフェイトさんに真っ先に言っべきだと思うんだが何で俺を最初に選んだのか

まだフェイトさんとは少し距離があるのかな？

「なら話は今度だな」

「・・・はい」

とは言ってもあのフェイトさんの事だ、キャロの意見を尊重してOKを出すんだろっな

・・・事前準備をしておくべきか

十五話 side 雨水 (後書き)

今更気づいたが原作よりキャラ口が確りしてきている気が・・・雨水
(反面教師)が居るせいかな？

十六話 side キャロ

自然保護隊。名の通り自然を保護し動植物を密猟者等から守る部隊、極地への派遣もあり人気の少ない部隊だけど私は大好き

数日前に雨水さんに一緒に行ってもらえないか相談を持ち掛けたけどアッサリ断られた

・・・むう

「キャロの好きなようにすれば良いんじゃないかな？」

「フェイトさん」

「雨水さんも口では文句は言うかもだけどきつとキャロの事を考えてくれるよ」

フェイトさんに相談してみると、とても心強い言葉を頂いた

「でも雨水さんをむりやり連れていくのは・・・」

「雨水さんを自発的に行かせる方法・・・んー私も雨水さんの事は鑑定師と講師をしている事くらいしか知らないもんなあ、なのはなら如何するかな？」

「なのは、さん？」

「あ、私の友達なんだけどね？説得するのがとても上手なんだ」

それは凄い特技ですね

あのダラけた雨水さんにも効果あるんでしょうか

「あの！その人に雨水さんの説得を頼めませんか？！」

「ん、んー大丈夫かな？確か来週くらいになのは休みがあるって言うってたし」

「よろしくお願いします！」

私が頭を下げるとフェイトさんは困ったように微笑んで分かったと一言返してくれた

一週間後、私は雨水さんの休みを高町なのはさんの休みと合わせてもらってこの間の雨水さんが買ってきてくれた美味しいケーキのあるミッドの喫茶店で合流するように取り付けてもらった

「始めまして」

「始めまして高町一尉、武勇伝は私の部署にまで轟いていますよ」

「恥ずかしいです」

どうやら名前くらいは雨水さんも知っていたようです

いつも増して表現が硬いのは一応上官だしな〜とか考えているに
違いない

「フェイトさんは久しぶりですね」

「あ、うん」

「今日は何か話だそうですが、キャラが何時もご迷惑をすみません
ね。お二人とも忙しいでしょうに」

「全然！全然そんな事ないよ！キャラの役に立てて私嬉しいもん！」

「にやはは、私も今日は暇だったから問題ないよ」

雨水さんはフェイトさんを見て高町さんを見たあとに礼儀正しく上官に対する態度を取ったあとに少し失礼と言って私を二人の見えない所に連れ出した

「あれは何だ」

「フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官。私の保護責任者でやさしいお姉さんじゃないですか」

「問題はそっちじゃねえ！あの砲撃魔の事を言ってるんだ！もしかして今日会わせたい人ってあの人か？！」

砲撃魔って女性に失礼ですよ、雨水さん

「そうです」

「ッ！キャロあー、別に俺は高町一尉が嫌いと言う訳では無いんだが余りあの人とは関わりたくないんだよ」

「え？なんですか？」

「噂は尾ひれがつき易いもんだけどそれでも、あの高町一尉の噂は他の二人を群抜く」

それから雨水さんは前に生徒から聞いた話を教えてくれた

何でも、高町さんと本局部隊のデモンストレーションの様な模擬戦があつたらしいのだが、そこで高町さんは一人で本局屈指のエリート部隊を圧倒しその場で生徒までも撒きこみ無双したそうだ

「ま、まさかあ」

高町さんは話では砲撃型、砲撃型はチャージに時間が掛かったりと強力な前衛が居て初めて役に立つポジション。そんな一人で無双だなんて

「ああ、俺も尾ひれが付いたんだとは思うんだが・・・その、あの人の魔法センスが異常なのは何と無く分かるんだよ」

「と、ともあれ！早くもどりますよ！お二人ともまっていますし！」

「やだなー、マジなんで俺なんかが・・・ヒューズうー、今こそお前の出番だろお？」

何故噂だけで此処まで恐がっているのかは不思議でしたけど呼んでおいて帰る訳にもいかず雨水さんは渋々戻った

しかし高町さんに笑顔を向けられた時は凄い苦笑いになってたけど

十六話 side キャロ（後書き）

満を期して管理局の白い悪魔こと高町なのは登場です！

コミックでのなのはさんの戦いを見てるともう常識なにそれ美味しいの？状態ですよ

十七話 side 雨水

前回のあらすじ

帰宅 キャロに明日は会って欲しい人が居るから時間を空けてくれと言われる 何故前日にと思ったが仕方ない 喫茶店で会うらしい
フェイトさん発見・・・高町なのは一等空尉殿？ つい咄嗟に観察眼で見えてしまい理不尽なくらいな才能を見る キャロに問い詰めると兎にも角にも話を でテーブルに座ったが何故か好意的な目でにこにこと笑顔を向けられる どうしよ・・・お話と称して砲撃を放つと言われている人間とよりによってお話とは・・・

「え、えーとそれで誰が俺に用なのかな？」

「私なの」

高町なのは様々！！！！白い悪魔と恐れられた砲撃魔が話し相手か
よおおおおお！

「なに？文句ある？」

「何も無いです！イエッサー！」

「そう、あのね。一回前にキャロちゃんから聞いてると思うけどキャロちゃんの為に一緒に自然保護隊に行ってくれないかな？」

きや、キャロの奴。まさか高町一尉に協力を求めるとは卑劣なッ！
あれか、フリードの炎で焼くのに飽きたから砲撃で来たか。んー詰んだな

「拒否権はあるんですかね？」

「・・・無い、なの」

目が恐い！何より胸元でキランキラン言ってるデバイスが恐い！

脅迫だ。説得が駄目なら脅迫なんてまさに悪魔だ。と言っか初対面の人間に脅しを掛けてくるとは

「何だかさつきから雨水さんの視線がとても失礼なの」

「べ、別に何も・・・綺麗だなーとか？」

「にやははーそれは嬉しいなっ」

「・・・雨水さん」

俺は褒め言葉を送ったはずなのに何故かフェイトさんとキャロから非難の目で見られた

結果だけ言つと結局俺も一緒に行く事になった

何故か既に異動願い等も提出された事になっており局としての準備は終わったあとだった

「つたく、面倒な」

「めいわいくでした？」

ミッドの次元転移ポートの様な所で適当に昼食を取りながら愚痴を零す

「迷惑かもなーとか思つなら巻き込むなよな」

「だって雨水さんと一緒に良かったですし」

「まー俺も機会があれば自然保護隊の皆にはお礼くらいしないと思つて思つてたからこれで良かったのかも知れんがな」

とは言え俺達が自然保護隊に居るのは約一年くらいになると思つ

理由は俺の講師休暇期間がそれくらいと言っただけ

「良かったんですよ。これで」

「ふーん」

昼食を終えるとすぐに手続きを済ませて転移する。するとすぐに向かえの人が来てくれた

しかもご丁寧の前に俺達をミッドまで案内してくれた、おっちゃんだった

「おー！久しぶりだな。お前等、少し背伸びたか？」

「伸びたよ、成長期は過ぎたがまだまだ成長する年頃だからな」

「私も少しだけ」

「そうかそうか！キャンプで皆が待ってるし、さっさと行くぞ！」

排気ガスを気にしてんのか車では無く徒歩・・・ん？ミッドの車は電気自動車じゃなかったか？

んあ・・・単に道が確りしてないからか

「にしても俺等は前回料理しか、してなかったから何気に自然保護

の仕事とか知らないんだよな」

「そうだなあ、主に保護指定の動物を守ったり金になりそうな動物を捕まえにきた奴を逆に捕まえたりお前等みたいに偶然迷い込む奴をキッチンと出口まで案内したり・・・偶に遺跡とかに見付ける奴も居るそうだが」

ホント動物愛護団体みたいな活動だな

俺の特典スキルだと天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。（長いので統率力と呼称）か全ての事象を観測する者。（表現し難いのでそれっぽく仮完全記憶能力と呼称）が役に立ちそうだな

「確かにこんな森ばかりの未開地なら遺跡くらい発見出来そうだな」

「ハハッ！この辺は既に調査済みだ！」

夢を壊しに掛かるなよ

十七話 side 雨水 (後書き)

レイジングハートさんが無言で圧力を掛ける。でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284x/>

高校生のリリカル爆走

2011年10月10日08時06分発行